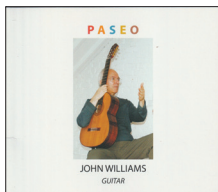




外盤 案内

I M P O R T D I S C



Paseo ウィリアムス

Paseo
John Williams (G)
JCW Recordings JCW7
イギリス盤

●ウィリアムス自身のレーベルによるアルバム of 7 枚目、「パセオ」のタイトルでウィリアムスの今までの活動の振り返りのようなプログラムを選んでいる。例えばボンセの 2 作品は Delyse と Columbia から初録音 LP に収録された作品であり新たな視点での再録音である。また、自作の〈バリオスを讃えて〉は〈ワルツ第 3 番〉や〈クリスマスの歌〉などを思わせる旋律を使いながら、ローカルな作曲家であったバリオスを世界に知らしめた自負を感じさせる小品、バリオスの語法も使用作曲家ウィリアムスの一面が感じられる。同じく他の 2 曲の自作も最終改訂版、〈鳥たちはいつ帰る〉のトレモロの美しさは聴きもの。このアルバムで最も面白いのはソルであろう。ウィリアムス自身この曲の主題がモーツァルトの曲から乖離している所に違和感を抱いていたようで、オリジナルの旋律に基づいた主題の提示としている。変奏も試みようとしたようだが結局後半はソルに敬意を表している。

[円柱の都市 (ブローウェル)、鳥たちはいつ帰る、バリオスを讃えて、アナザー・タイム (ウィリアムス)、星の涙 (カリージョ)、お聞き心よ、スケルツィーノ・メヒカーノ (ボンセ)、モーツァルトの〈魔笛〉の主題による序奏と変奏曲 Op.9 (ソル〜ウィリアムス)、ファンダンギーリョ (トゥリーナ)]



iLa Guitarra Ancestral! グロンドーナ

iLa Guitarra Ancestral!
Stefano Grondona (G)
Stradivarius STR 37302
イタリア盤

●グロンドーナの演奏活動 50 年記念を兼ねた録音、9 台のトーレス・ギターを用いグロンドーナが各ギターに適していると思われる作品を演奏したアルバム (ブックレットには各ギターの写真もありトーレスの形状の変化も見る事ができる。FE08 のサウンドホールの装飾も〜最近ではネットに写真がよくアップされているので興味のある方はそちらの方が分かり易いかも)。グロンドーナ自身はトーレス・ギターを気に入っており、今までも多くの演奏／録音に使っている (1998 年には「La Guitarra De Torres」のタイトルでリョベートとタレガの CD を出している)。このアルバムでは一部はトーレスによる過去の録音も使われているようだ。録音時期の違いもあるが各トーレスの音色の差異もグロンドーナの演奏から聴ける。リョベートが所有していた FE09 で聴くリョベートの作品の華やかさや、タレガ所有の FE17 による演奏などギターの音色と作品の個性がよくマッチしているように感じる。

[ブランシュローシュ氏の死に寄せるバリで作られたトンボー FbWV 632 (フローベルガー)、ソナタ・ニ短調 K.213 (スカルラッティ)、スペイン舞曲第 5 曲 (グラナドス)、アメリカの遺言、聖母の御子、羊飼いの娘 (カタルーニャ民謡〜リョベート)、ロマンス、練習曲 (リョベート)、前奏曲第 1 番ニ短調、オレムス、エンデチャ、アラビア風奇想曲 (タレガ)、練習曲ハ長調 Op.6-8、練習曲ロ短調 Op.35-22 (ソル)、前奏曲 (M = トローバ)、5 つの前奏曲 (ヴィラ=ロボス)、ほか]



F. Mignone: Doze Valsas モナルダ

F. Mignone: Doze Valsas
Andrea Monarda (G)
Brilliant Classics 997369
オランダ (欧州) 盤

●(ニャタリと) ミニョーネの《12 の練習曲》を録音したモナルダがもう一つの重要なチクルスである《12 の練習曲形式のワルツ》を録音した。ミニョーネ自身はギターには消極的であったが、バルボサ=リマのために書いた《12 の練習曲集》の完成によりこのワルツ集の作曲にも興味を持ったようだ。タイトルに含む「練習曲形式」にはこの練習曲集での手ごたえと、もともと得意としたブラジル風ワルツ (ピアノのために多くの曲を生み出している) のギターへの融合を示しているのであろう。12 作品とも短調で書かれているが、実態は調性や民族風を越えたモダンな響きを持っている。〈ヘビニカンド〉から〈モジーニャ〉までの 4 作品はアブリューやアサド・デュオの師でもあったタヴォラに献呈されたオリジナル曲、どこか古き良きブラジル音楽の風情がある。残りの 2 曲はピアノからの編曲。ミニョーネの持つブラジルの雰囲気色が濃く出ており、ワルツ集とはまた異なった色彩感である。

[12 の練習曲形式のワルツ、ヘビニカンド、ミヌエート = ファンタジア、ショロ、モジーニャ、ブラジルの歌、奥地の伝説 (ミニョーネ)]



Les années folles アギアル

Les années folles
Pedro Aguiar (G)
Evidence Classics EVCD120
ドイツ盤

●タイトルである「狂騒の 20 年代」、第 1 次世界大戦後のパリには多くの芸術家が集まり、音楽においても戦前のベルエポックとは異なる新しい文化が融合した音楽文化も生まれた。この時代はセゴビアがヨーロッパで知られるようになった頃でもあり、新しいギターレパートリーが生まれた時でもある。このアルバムではブラジル出身で 2018 年のアルハンブラ国際ギターコンクールの覇者でもあるアギアルがこの時代の作品を録音した。ファリャの小品はドビュッシーの追悼曲集の 1 曲として作曲したが、残りの 4 作品はセゴビアに関わる作品である。ヴィラ=ロボスの練習曲集の出版は諸事情で遅れたが作曲自体は 20 年代であり、アギアルもこの初稿譜に基づいて演奏している。ボンセの組曲は当時流行の偽作物でその頃ほとんど知られていなかったヴァイス作として発表されたもの。タイユフェールの作品は 1970 年代に出版されたが、この時代の 6 人組の雰囲気を伝えるために選ばれている。

[ドビュッシー讃歌 (ファリャ)、セレナード (サマズイユ)、組曲イ短調 (ボンセ)、ギター (タイユフェール)、12 の練習曲 (ヴィラ=ロボス)]